

2013/06/06 07:50

<QUICK>【アジア特Q便】呉軍華氏「中国を視る」 サニーランズ首脳会談における米中両国の思惑

QUICKではアジア特Q便と題し、アジア各国・地域の経済動向について現地アナリストや記者の独自の視点をニュース形式で配信しています。今回は、日本総合研究所理事の呉軍華氏がレポートします。

サニーランズという米国カリフォルニア州ランチョ・ミラージュにある保養施設が、大きくクローズアップされている。オバマ米大統領と中国の習近平国家主席が6月7日から8日にかけて、そこで初めての首脳会談を行うと発表したからである。この発表を受けて、米中両首脳がどうして今、そしてなぜサニーランズで会談するのかを巡り、ワシントンや北京で大きな議論が巻き起こった。

確かに、G2という表現が適切か否かはともかくとして、共に相手国との外交関係を自国にとって最も重要と位置づけている米国と中国が突然、初の米中首脳会談を首都ワシントンから遠く離れたサニーランズに設定したのは些か唐突感があるかもしれない。しかし、米中関係が直面している問題を改めて見極めると、実はそれほど理解が難しいことではない。

人権問題から人民元問題まで、米中関係はかねてから多くの問題を抱えてきている。しかし今、両国の関係者が最も頭を悩ましているのはむしろ、米中にとっても世界にとっても両国の影響度合いがますます高まっているにもかかわらず、米中の相互信頼感が大きく低下していることだと思われる。この相互不信の問題を解決するために、ワシントンも北京も米中首脳同士の個人的な信頼関係を一刻も早く構築することが不可欠だという共通認識を持っているといわれる。習主席の中南米訪問を契機にサニーランズでオバマ大統領と習主席がノーネクタイで2日間共に過ごすことは、こうした信頼関係の構築に絶好なチャンスだととらえているようだ。

ちなみに、この首脳会談の目的について、筆者はワシントンで幾人もの関係者から「とにかく米中両首脳が直に会って話をするは何よりも重要な目的だ」との話を聞かされた。もっとも、米中関係の安定化はもとより、個人的な信頼関係を構築するためにも、オバマ大統領と習主席は数多くのテーマについて議論することになる。

たとえば、北東アジアの安全保障関連で、挑発を重ねてきた北朝鮮問題の解決にあたって、6カ国協議の再開を含めオバマ大統領と習主席は米中間で協力できる分野の検討が進むものと思われる。また、尖閣諸島の領有権問題をめぐって緊張した日中関係も、今回の首脳会談のテーブルに上る可能性が高い。ちなみに、尖閣問題に関して中国は、つい最近まで日中両国間の問題との認識で通してきたが、今回の首脳会談に先立ち、崔天凱中国駐米大使は米外交・国際政治専門誌フォーリン・アフェアーズとのインタビューで、米国が客観的な第三者の立場を貫いて日中関係を調停しようとするような状況になれば、中国は歓迎すると発言した。加えて、米国で大きく問題視されているサイバーセキュリティ問題も重要な議題の一つとして議論される一方、世界経済や気候変動などの問題についても両首脳間で意見交換されると思われる。

イデオロギー的に対立しつつも、世界経済とアジアの安定に共通な利益を持つ米中両国の首脳が2日間、膝をつき合わせての会談を通じてどれだけ協調できる分野を拡大できるかは大きな見所である。